足利市機神山古墳群の形成過程について

斎藤　　弘
中村　享史

1．はじめに
2．古墳群の概要
3．研究史
4．機神山山頂古墳の出土遺物・墳丘・石室及び埴輪
5．前方後円墳の比較
6．出土遺物の年代と性格
7．石室の年代と性格
8．古墳群の形成過程
9．まとめにかえて（今後の課題）

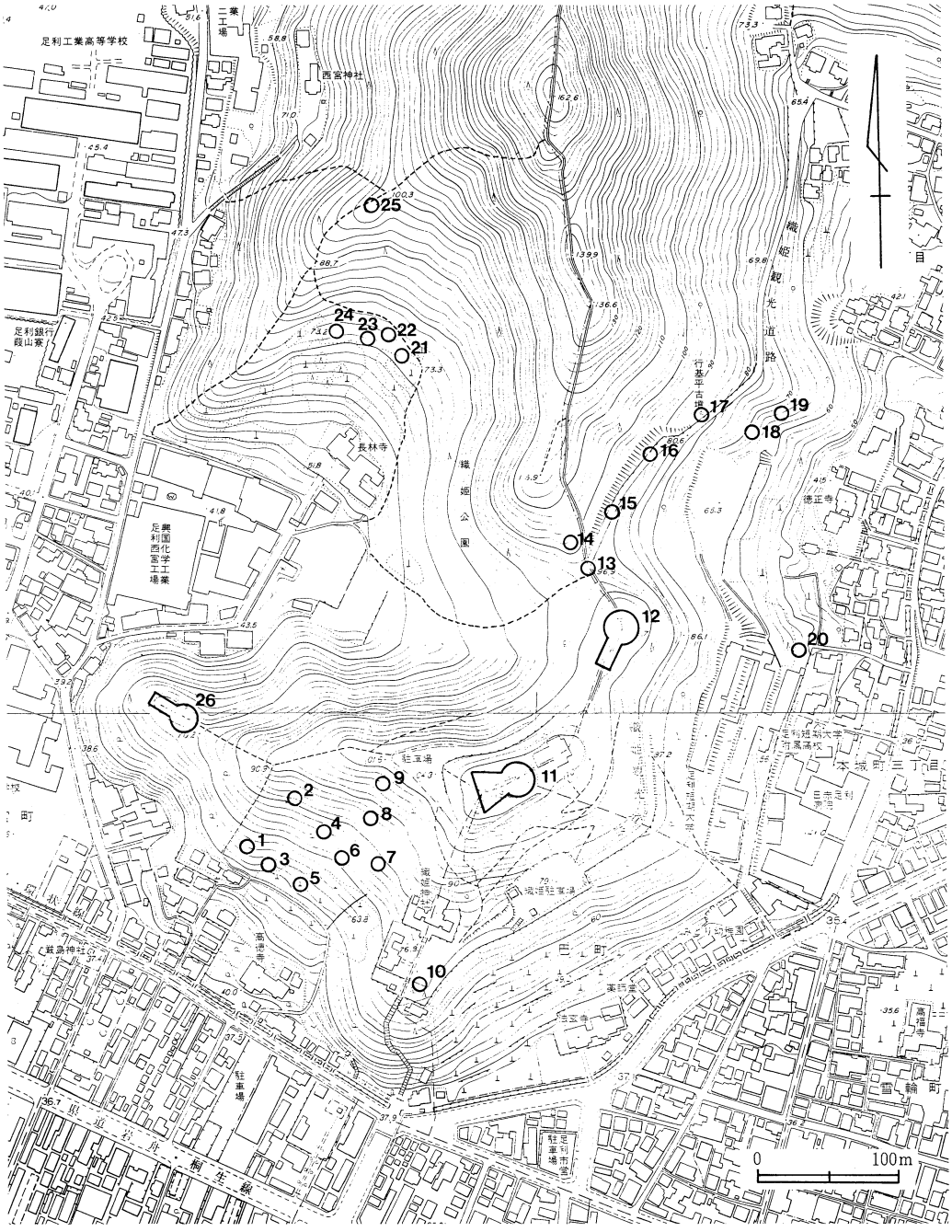
1．はじめに

足利市機神山古墳群は、市街地を見おろす機神山丘陵に存在する。３基の前方後円墳を中心に展開し、本地方の最有力古墳群のひとつとして位置付けられている。特に機神山山頂古墳は、市内各地から仰ぎ見ることができ、山麓の織姫神社とともに、織姫公園の中核として市民に親しまれている。

筆者の一人である斎藤がかつて勤務していた栃木県立足利工業高等学校の地歴部では、平成元年以来、本古墳群の測量調査を、毎年１基づつではあるが実施してきた。その結果、これまでのところ前方後円墳２基、円墳１基を図化、成果を刊行している。本古墳群を形成する前方後円墳について、墳丘の「整備」が完了している機神山山頂古墳を除き、一応自分達の図面を作成することができた。同地歴部では、さらにデータを蓄積して古墳群の構成について検討すべく、円墳群の測量を継続している。

これらの成果を踏まえ、今回は群中でも傑出した３基の前方後円墳（機神山山頂古墳、行基平山頂古墳、機神山26号墳）について、測量図をもとに墳形を比較し、その形成過程や性格を論じてみたい。また古墳群を評価するにあたり、その築造順序ばかりでなく、諸要素を多角的に分析する必要のあることは言うまでもない。そこで、機神山山頂古墳の石室の実測を実施する等、これまで資料を整えてきた。ここでは石室、副葬品、埴輪などを取り上げ、足利地方の他の古墳と比較し、本古墳群の位置付けに言及する。尚、円墳等を含めた古墳群全体については、今後の測量調査の進展を待って、後考を期したいと思う。

小稿は斎藤と中村が内容を協議した上で分担執筆した。1、2、3、4(2)、5、6、8を斎藤が担当し、4(1)(3)、7、9を中村が担当した。挿図は共同で作成した。



第1図　機神山古墳群・古墳分布図

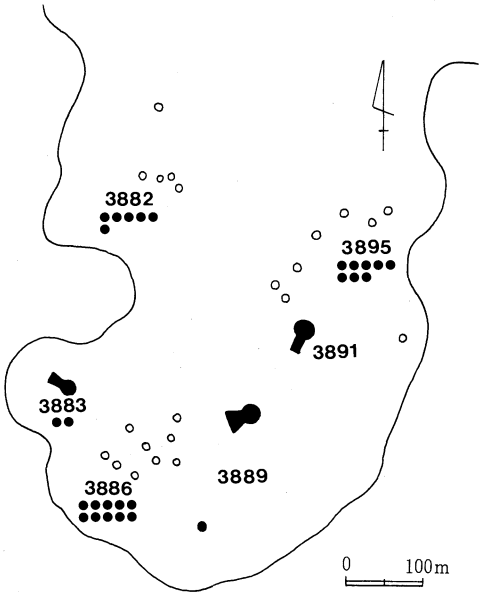
2．古墳群の概要

足利北部の丘陵は、足尾山系の南端にあたり、多くの小支谷によって刻まれている。この南側を、渡良瀬川が多くの小河川を合流しながら南東に流れている。但し中世以前は、南側に位置する現在の矢場川床にその主流があったと考えられている（足利市役所　1928）。南部は渡良瀬川扇状地で砂質高燥な平野である。北部はかつて湿地や沼地であり、山間部に源を発する小河川が渡良瀬川等の自然堤防に遮られて形成されたものと考えられる（日下部　1974）。

機神山古墳群は、機神山または織姫山と呼ばれる、南北にのびる丘陵の、平野に臨む先端部に営まれている。尾根上、斜面、裾部に古墳は分布し、その範囲は東西約500m、南北約600mである。標高は50～104mの間である。

昭和61年に実施された足利市の分布調査（足利市教育委員会　1986）によれば、前方後円墳3基、円墳21基、竪穴式小石室2基の、計26基が確認されている。（第1図）これに先立つ昭和18年刊行の『足利市郡古墳調査誌』（足利市教育会ほか　1943）によると、この範囲に前方後円墳3基、円墳27基が記載されている。（第2図）[1] 単純に比較して、4基の円墳が記録をとどめないままに失われたことになる。

3基の前方後円墳は尾根筋に営まれている。最高所に機神山山頂古墳が存在する。150m程北の尾根沿いに行基平山頂古墳が存在する。また機神山26号墳は、西へ250m程尾根を下った地点に位置する。



第2図　『足利市郡古墳調査誌』に記載された古墳分布

1．比定できる古墳は黒塗りにした。
2．他は該当する番地に黒丸で個数を示した。
3．白丸は足利市の分布調査による。

これ以外の古墳は、3つの小グループに分かれて分布している。行基平山頂古墳の北西、小さな谷に向かう南向きの斜面に、5基の円墳が存在する。長林寺裏古墳群とも呼ばれている。また、行基平山頂古墳から北、鞍部を挟んだ尾根筋と東向きの斜面及び山裾に、円墳6基と竪穴式小石室2基が存在する。行基平古墳群とも呼ばれている。機神山山頂古墳から南の、南向きの斜面と山裾には、円墳10基が存在する。こうした分布のあり方は、『足利市郡古墳調査誌』の番地から推定した分布図とも一致する。（第2図）但し、その後の歴史において、寺院の造営、用水堀の掘削等が盛んに行われた地域であり、古墳群造営当時からこのようなグループが存在したと判断するのは困難である。[2]

前方後円墳は後述するとして、その他の主な古墳について概観する。

長林寺裏古墳（機神山24号墳）（大沢哲道　1913）

大正２年、長林寺住職大沢哲道師により、偶然の機会に石室が発見された。山寄せの円墳で、直径18.5mを測る。南に開口する河原石小口積み胴張り型横穴式石室を有する。出土遺物は双龍環頭柄頭１、鍔１、直刀２、轡２、兵庫鎖付き鐙１、鉄鏃51、銅釧２、金環５である。

織姫神社境内古墳（機神山10号墳）（後藤ほか　1937）

昭和11年、織姫神社石垣の造成工事に伴い、発掘調査が行われた。「丁」字形を呈する横穴式石室を有する。出土遺物は直刀４、鍔片、刀子１、金環２、銅環３、鉄鏃若干である。また円筒埴輪片の外、盾形、靫形、靫形、大刀形の形象埴輪が出土している。

行基平１号墳（機神山17号墳）（足利市史編纂委員会　1974）

昭和40年代、織姫山に登る観光道路の建設に伴い発掘調査が行われた。直径10～12m程の円墳で、割石による横穴式石室を有し、直刀１、刀子１、鉄鏃約30本が出土した。埴輪は見られなかった。

行基平３号墳（機神山16号墳）（足利市史編纂委員会　1974）

１号墳と同時に発掘調査が行われた。直径12m程の円墳で、割石による横穴式石室を有し、耳環１と須恵器が出土した。埴輪の出土も伝えられている。

行基平４号墳（機神山15号墳）（足利市史編纂委員会　1974）

１号墳と同時に発掘された、墳丘を持たない竪穴式小石室である。副葬品は見られなかった。

行基平５号墳（機神山13号墳）（足利市史編纂委員会　1974）

１号墳と同時に発掘された、やはり墳丘を持たない竪穴式小石室である。副葬品は見られなかった。行基平山頂古墳と機神山14号墳の間の、鞍部に立地している。両古墳との関係が注目される。

３．研究史

本古墳群の研究史は、管見によれば明治26年の機神山山頂古墳の発掘に遡る。この時の記録は、様々な資料に断片的に残されている。類推すると次のような顛末であったと考えられる。

発掘は、明治26年６月、地元の湯沢勝蔵、峯岸政逸の両氏によって行われた（川島　1952）[(3)]。山頂（実は墳頂）の平坦な部分から１間程下の地を崩し、平地にし桜を植える計画で開拓をはじめたところ、石室の入口と多数の埴輪が発見されたという。（若林　1893）またこのころの機神山山頂古墳の様子と、出土遺物を描いたと推定されるスケッチが『下野國古墳圖誌』（著者、発行年不明）や『足利町織姫山頭古墳発掘明詳図』（相場　1898）[(4)]に掲載されている。当時大きな話題として人口に膾炙していたことと思われる。尚、出土遺物の内、人物埴輪はその後もよ

く引用されている（丸山　1920、川島　1938）。これら一切の遺物の所在は、残念ながら不明である。

大正２年、前述した長林寺裏山古墳が発見された。発掘と報告は高橋健自、谷井濟一の両氏が行い、注目を集めた（高橋ほか　1913）

昭和11年には、前述した織姫神社境内古墳の発掘調査が行われている。後藤守一、内藤政光、森貞成の各氏が報告している。

昭和18年には、紀元2600年を記念して古墳の分布調査が丸山瓦全氏を中心に行われ、『足利市郡古墳調査誌』が刊行された。激動の時代の中での労作であり、関係者の苦労が偲ばれる。また既に消滅してしまった多くの古墳を今に伝える貴重な資料である。

昭和43年、明治100年記念事業として、織姫山公園の整備が、５か年計画で実施された。行基平古墳群の緊急調査も、これに伴う道路工事が原因である。機神山は市街地からも近く、新発見が人々から注目され、多くの記録が残された反面、観光開発や公園等としての整備が早くから計画され、いくつかの古墳が破壊された。明治24年以来の発見の歴史は、こうした性格の反映でもある。ある意味で現代の行政発掘の先駆けとも言えるだろう。特に昭和40年代は重大な危機に瀕していたのであった。

この頃、足利の古墳について前澤輝政氏が多くの研究を残している。機神山山頂古墳について、市内最高所の立地と卓越した副葬品から、足利の最有力古墳の一つに挙げている。また、機神山の地名から、機織の術を盛んにした豪族が、神として山頂に葬られ、「機神」として崇められたと推定している。また、行基平山頂古墳については、墳形などから中期古墳として位置付けている（前澤　1975、1977、1983）。

一方、市橋一郎氏は、立地、石室、埴輪等から、古墳群の築造順序を推定し、併せて足利地方に於ける埴輪、前方後円墳、横穴式石室の終末について発表し、県内の古墳研究に大きな影響を与えた（市橋　1979）。

両氏とも、遺跡の保存運動を展開する傍らで進められた研究であり、この点でも敬意を表すべき成果であると言えよう。

昭和61年には、前述の足利市による分布調査が行われた。ここで注目されるのは、機神山古墳群の範囲を、従来の行基平古墳群と長林寺裏山古墳群を含めて捉えた見解である。山頂の前方後円墳群と周囲の円墳群を、一つのまとまりとして捉えようとしたもので、卓見であると言えるだろう。

平成元年度から、足工高地歴部による測量が、毎年行われている（栃木県立足利工業高等学校地歴部　1990ａ、ｂ、1991、1992）[5]。

平成２年には、長林寺裏山古墳出土環頭大刀に関する、穴沢味光、馬目順一氏による論文が

発表された（穴沢ほか　1990）。長く所在不明であった遺物が発見されたことは大きな喜びであるとともに、この考察により、再び本古墳群は注目を集めるに至ったのである。

4．機神山山頂古墳の出土遺物・墳丘・石室及び埴輪

(1)石室（第3図）

機神山山頂古墳の横穴式石室は後円部南側に開口している。石室の床面は古墳の基底面より高い位置にある。平面的には玄室と羨道の区別のない無袖型であるが、石室の最大幅は奥壁より前方にあり、そこから羨道入口に向かって幅を狭めており、側壁の平面形がゆるい胴張りを描いている。石室の主軸はN－12°－W、現存する全長は8.08m、幅は奥壁直下で1.98m、最大部分は奥壁から2.73mのところで2.73m、入口部前端で1.53m、高さは奥壁で2.34m、入口部前端で1.23mである。

天井には現状では五枚の巨石を横に架構している。ただし、奥から五石目の天井石の先にも羨道の側壁は延びており、さらに前方に天井石が存在していた可能性がある。また、三石目と四石目の天井石はなかばずり落ちている。大きさは奥から三石目がやや小さいが、ほかはほぼ同大である。その中で最大なのは一番奥の石材で、長さ1.80m、幅2.15mである。現状では全長や石室入口部の様子は不明であるが、羨道前端には特別な施設は施されていない。

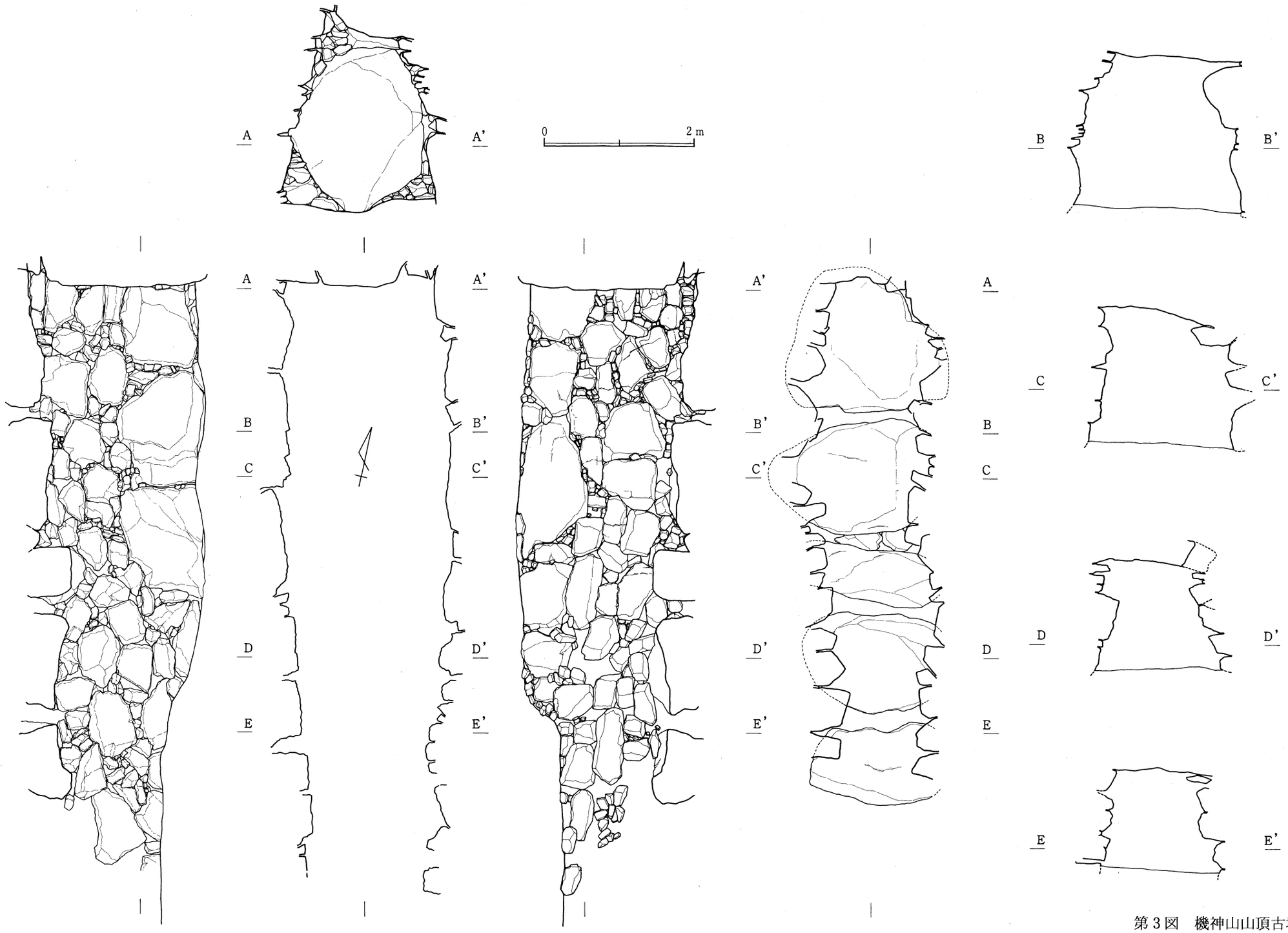
奥壁は、立てられた一枚の巨大な割石とその上の平積みにされた割石一つで構成され、ほぼ垂直に立ち上がる。下段の巨大な割石は高さ2.20m、幅1.80mの菱形で、側壁との隙間には小さな石を詰めている。上段の平積みの割石はその前端に天井石の端が架かっている。しかしこの石は両側壁には跨がらず、西側壁に接する側を充塡している小石と共に高さの調節のために挿まれたもので、奥壁全体としては一枚石に見えるように意図していると考えられる。

側壁は、奥側では大型の石を立てて積んでいる。その範囲は東側壁では奥から五石目、西側壁では奥から四石目で、両側壁とも奥壁から5.17mの地点にあたる。この部分で比較的石積みの目地が通るのは最下段の石材の上面のラインだけでそれも東側壁では奥から三石目までで奥壁から4.13m、西側壁では四石目までで奥壁から4.53mの所までである。その上には石材を多いところで四段、少ないところで二段平積みにしている。奥から5.17mの地点より入口側は最下段の石が奥側より小さいものになっており、平面形には現われないものの、玄室部分と羨道部分で石の大きさを変えようとする意識が窺える。

床面は川原石が敷かれていたという記述があるが（相場　1898）、現状では流入した土砂によって覆われているため、不明である。流入土は入口部付近では厚いが奥側では薄く、奥壁直下では攪乱のため根石の底面が露出している。

で

りよを最口もとぼ全ぼ小こに側み奥多最道に直



第３図　機神山山頂古墳横穴式石室実測図

(2)出土遺物

機神山山頂古墳の副葬品は、現在所在不明である。その品目については、文献によって多少の違いがみられる。以下年代順に取り上げる。

『足利町織姫山頭古墳発掘明詳図』（第10図）

相場朋厚氏が、発掘当時の自らのスケッチを基に、明治31年11月上旬、湯沢氏の要請により執筆したものである。絵図から推測される出土遺物は以下のとおりである。

円頭大刀（鍔があり、柄間には雲形の模様がある。金銅装。）1、直刀3、刀装具片、鞘に装着される金具3、責金具2、鞍の磯金具片、雲珠または辻金具(?)3、雲珠の爪もしくは杏葉等の立聞(?)2、古鏡1、耳環16、鞦の座金具(?)3、不明金具多数、鐙1、須恵器大甕破片2、須恵器（瓶類）1、須恵器口縁部破片1、鉄片多数、小玉（青、紺、浅黄色）数個、切り子玉（水晶）1、丸玉（玻璃、碧玉等）10、人物埴輪6、馬形埴輪（頭部1、脚部4、腰部1、馬鈴1）、翳形埴輪(?)1。

「下野國足利に於て近頃発見せる埴輪土器」

機神山出土として、馬形埴輪（鐙、馬鐸、鞍の各部分）靫形埴輪(?)1、人物埴輪頭部1を掲載している。人物は他の資料にも多く掲載されているものである。

『下野國古墳圖誌』

この資料には機神山山頂古墳の名が明記されているわけではないが、『足利町織姫山頭古墳発掘明詳図』と鐙、刀装具、鞦金具(?)が共通し、「下野國足利に於て近頃発見せる埴輪土器」等に掲載されている人物埴輪もみられる。

また峯岸政逸による顚末が転載されている。これは明治26年6月13日に足利警察署長に届出たものである。その目録部分を引用する。

「剣1、鏡1、白玉1、青玉1、金環15、鐙1、八幡座ノ如キモノ5、刀折3、矢ノ根数本、鎧飾3枚、土焼人物7、同馬頭2」

員数に多少の違いはあるものの、相場氏の記録と概ね一致する。機神山山頂古墳のものと考えてよかろう。尚、この後に足利郡三重の出土品について記述している。

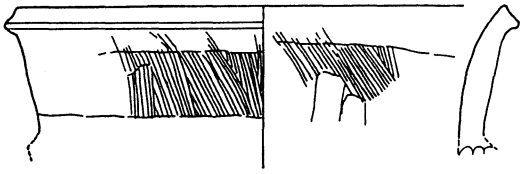
「足利地方の古墳文化」

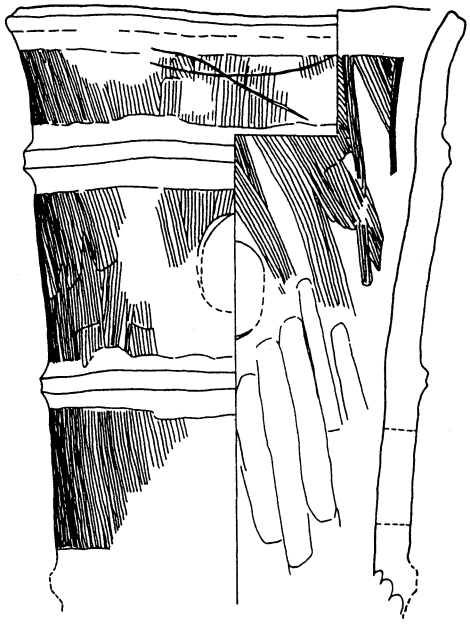
副葬品として次の出土を伝えている。出典は『古墳発掘遺物雑記』とある。明治年間の記録類と大きく異なっている。どこかで大きな誤りがあったとしか考えられない。

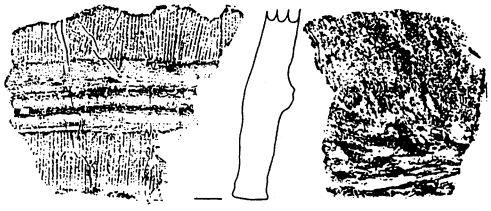
仿製鏡２面（獣帯鏡、直孤破鏡）、刀剣２、鍔２、勾玉、丸玉、小玉、六鈴釧、轡１、杏葉２、鉄鏃17本、埴輪土偶、鳥、馬首、靫、盾、須恵器（提瓶）

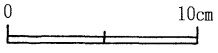
『下野の古代史』

直刀２、鉄鏃17、獣帯鏡（仿製）２、六鈴鏡１、杏葉１、轡１、勾玉、小玉、提瓶（須恵器）が出土したと記載されている。出典は記されていない。『近代足利市史』等の記載はすべてこの文献と同じである。









第４図　機神山山頂古墳出土埴輪

この他に、その後採集された埴輪が発表されている。（市橋ほか1986）円筒埴輪３個体分である。器形はやや開き、口縁部が少し外反する。突帯はやや低い。ほぼ水平に巡っている。上から１段目に「×」字形の線刻がある。２、３段目には透孔がみられる。外面は斜め方向の刷毛目。10cm程で途切れるが、目を通そうという意識はあるようだ。内面は、口縁部が横撫で、２段目中位までが不定方向の刷毛目、その下は撫でを施している。この他に、いわゆる低位置突帯を有する基部も採取されている。（第４図）

(3)墳丘（第９図３）

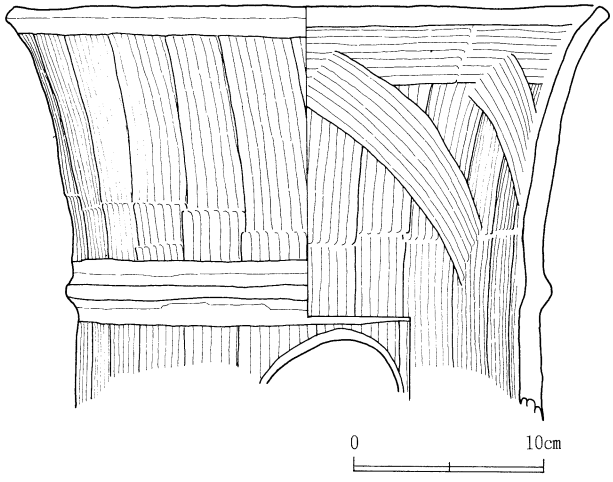
墳丘は現在芝が植えられて整備されている。測量は今回行なわなかったが、整備前の測量図があるのでそれを参考に記述したい（足利市史編纂委員会　1974)。墳形は前方部の幅が開き気味の前方後円墳である。主軸がＮ－86°－Ｅで、前方部を西に向けている。前方部と後円部の高さはほぼ等しい。墳頂の標高118.40m、全長約36m、後円部径約19m、前方部幅約19m、後円部高約３m、前方部高約３mと報告されている。山頂に位置し、周辺は道路のため削平を受けており、確認調査を行なっていないため、現状では墳端や周溝の有無、盛土の範囲は明確にできない。

５．前方後円墳の比較

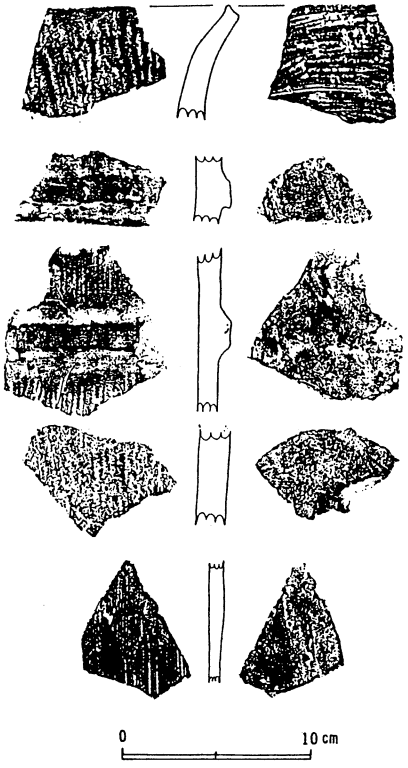
(1)行基平山頂古墳の墳丘の特色と埴輪（第６図、第７図）

行基平山頂古墳は測量の結果、全長約39m、後円部径約18m、前方部幅約11m、後円部高約3.2m、前方部高約2.2mとなった。主軸方向は、Ｎ－14°－Ｗを示す。尚、図の等高線は20cm間隔である（栃木県立足利工業高等学校地歴部　1992)。『近代足利市史』では、全長約50mとしている。前方部先端をどこに捉えるかによって異なる数値が出たのであろう。この古墳は尾根筋のやや高まった地点に、地形を利用して造営されたと考えられるので、必ずしも鞍部を裾と認識する必要はないと考える。発掘調査をしなければ確かなことは不明である。

墳形は柄鏡形に近く、前方部と後円部には約１mの比高差がある。小形の前期古墳を思わせる。主体部は

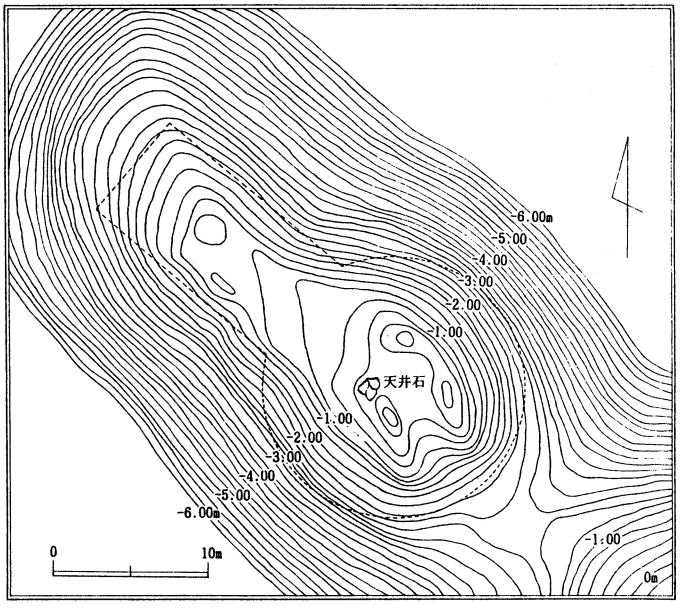


第５図　十二天古墳出土埴輪実測図

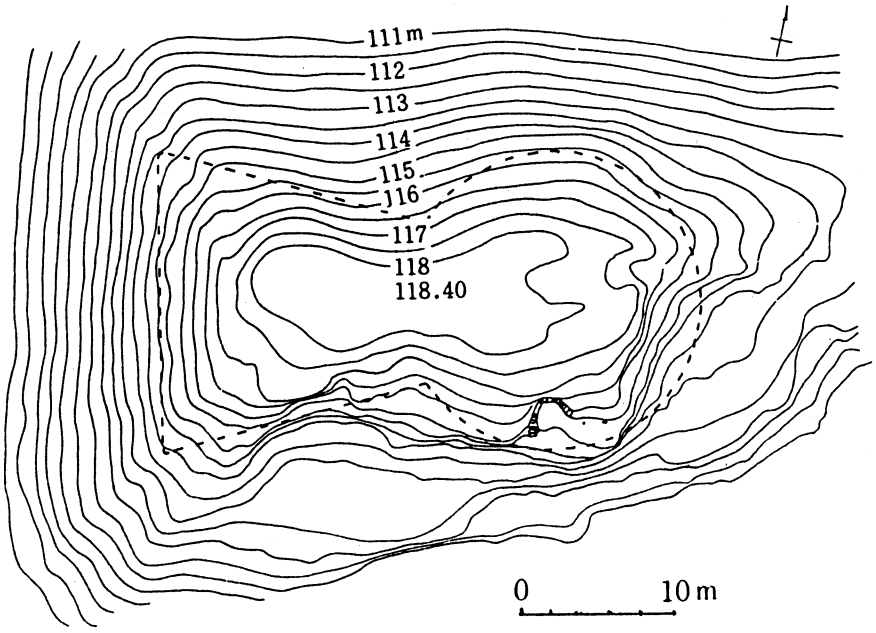


第６図　行基平山頂古墳出土埴輪

第７図　行基平山頂古墳墳丘



第８図　機神山26号墳墳丘



第９図　機神山山頂古墳墳丘

未発見である。墳丘が低く、横穴式石室を想定しにくい感がある。これまで中期古墳として位置付けられてきた。

埴輪は最近まで比較的多く採取できた。これまで発表されてきた資料（市橋ほか　1986）によると、直立する器形で、刷毛目は刷毛の間隔が粗い。足利市助戸町十二天古墳（前澤ほか　1985）と類似する。（第７図）

⑵機神山26号墳の墳丘の特色（第８図）

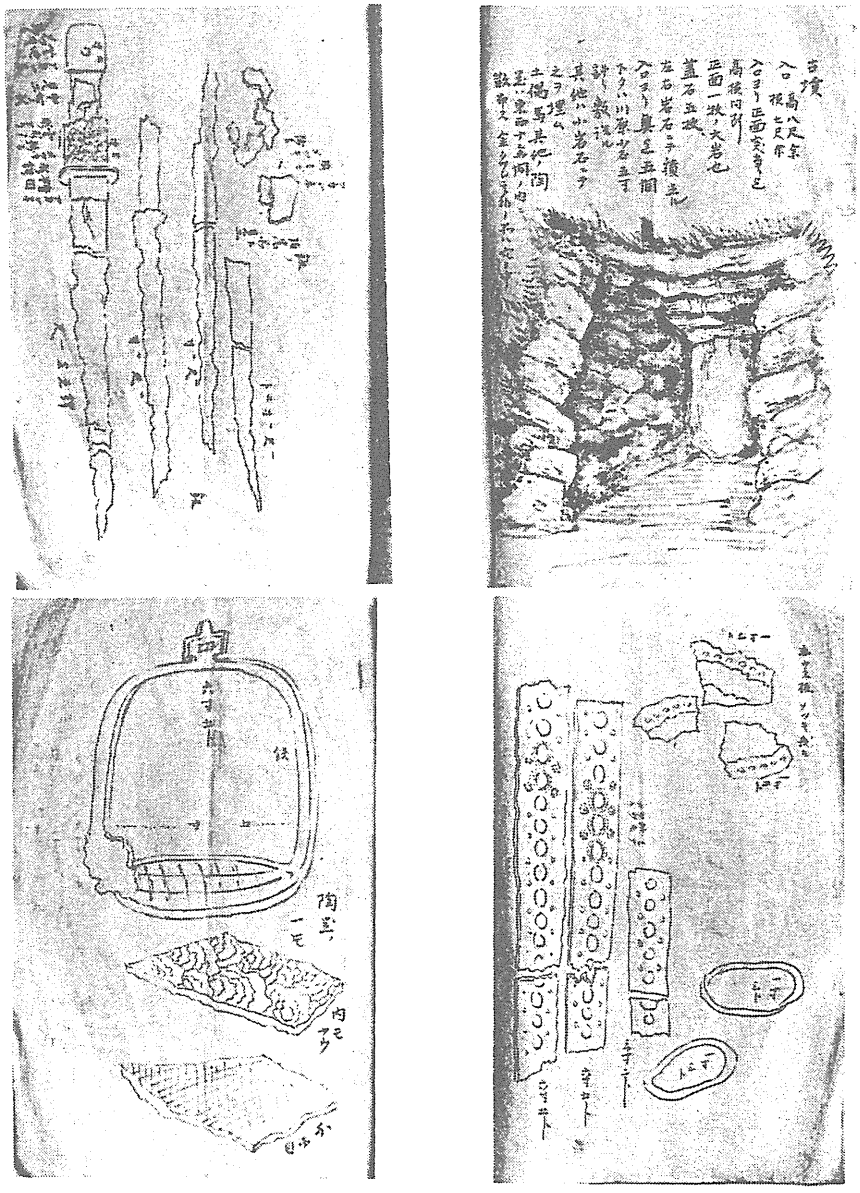
測量の結果、墳丘規模は、全長約31m、後円部径約17m、前方部幅約8m、後円部高約2.4m、前方部高約1.2mとなった。主軸方向は、N－50°－Wを示す。（栃木県立足利工業高等学校地歴部　1990ａ、ｂ）横穴式石室の天井石が露出していることから、築造当時はもう少し高かったかもしれない。

行基平山頂古墳と同じく柄鏡形である。よく似た墳形で、同一規格によるものか、同じ系譜上の設計者によるものか、何等かの強い関係が考えられる。本古墳の方が、ひとまわり小さく、前方部がやや平で広いという印象である。

採取された埴輪は小片で、時期は論じられない。

(3) 3基の前方後円墳の築造順序

これら3基の前方後円墳の墳丘を比較する。一般に前方後円墳は、新しくなると前方部が開き、後円部と高さが等しくなり、やがて逆転するとされている。機神山山頂古墳は、前方部がよく開き、後円部との比高差がない。3基のうち最も新しい形態である。行基平山頂古墳と比べて機神山26号墳の前方部は、墳頂が広い点で異なっている。裾では11m：8mであるが、墳頂はどちらも幅4m程である。地形による制約を考慮するならば、機神山26号墳の方がより発



第10図　機神山山頂古墳の石室・円頭大刀・鎧

達した形態と言えるだろう。

墳丘からみた築造順序は、既に指摘されているように、行基平山頂古墳→機神山26号墳→機神山山頂古墳と考えて差し支えなかろう（栃木県立足利工業高等学校地歴部　1992）。

尚、主軸方向は尾根筋に制約されるので、築造順序とは無縁であろう。しかしどの古墳も、丘陵の奥の方に後円部を向けている点で共通である。

6．出土遺物の年代と性格

⑴副葬品

4節で検討した機神山山頂古墳の副葬品からは、どんな年代を推定できるだろうか。確かな副葬品で年代を示せそうな遺物として、円頭大刀、鐙、須恵器等を挙げることができる。大刀は鞘の装具の文様や柄間に金銅を貼っている等の特徴から、ＴＫ209型式に併行すると考えられる（瀧瀬　1984）。鐙は、踏込が幅広く柄が短い。6世紀末以降と考えられる。須恵器大甕は内面に青海波文がみられる。陶邑編年のⅡ期の特色である。（第10図）

このようにＴＫ209型式に併行すると考えられるものがみられるものの、多くの副葬品の一部であり、追葬の可能性も考慮しなければならない。埴輪の編年を試みた上で再検討したい。

⑵埴輪

ここでは6世紀の足利、佐野、田沼に地域を限定して埴輪の編年を行い、本古墳の築造年代を考える。編年に使用する資料は、完形もしくは器形のある程度わかるもので、機神山山頂古墳以外の出土古墳名は次の通りである。

足利市正善寺古墳（前澤ほか　1989、1990）
水道山古墳（市橋ほか　1986）
明神山5号墳、同8号墳（前澤ほか　1989）
赤城神社古墳（前澤ほか　1989）
中日向3号墳（足利市教育委員会　1986）
吾妻1号墳（足利市教育委員会　1986）
佐野市中山8号墳（森田　1985）
十二天塚古墳（矢島ほか　1988）
蓮沼3号墳（青木　1981）
小峯山4号墳（矢島ほか　1989）
米山古墳（木村ほか　1986）
田沼町一瓶塚古墳（森田　1984）

これらの古墳を、首長墓と群集墳に分けて考えた方が、埴輪の実態をよく反映できると思わ

れる。但し、首長墓と群集墳の境界をどこに求めるかという問題もある。古墳の階層の問題は後考を期すものとして論を進める。

A　分類

分類の主な観点は、器形と径である。大きく3種類に分け、それぞれさらに細かな特徴を検討していきたい。

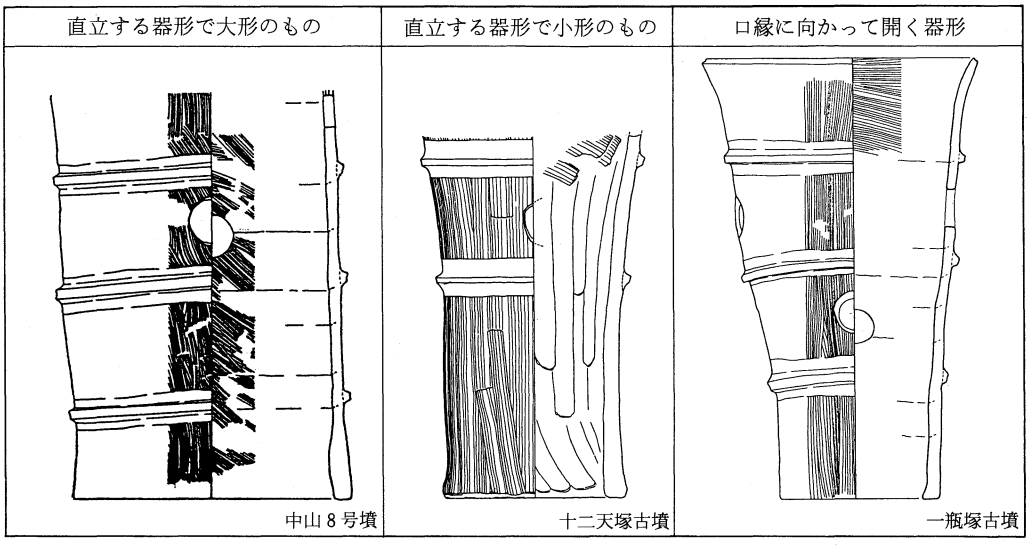
器形に注目すると、直立して文字どおり円筒形を呈し口縁だけが開くものと、口縁に向かって基部から徐々に開くものがある。直立するものは、さらに径が30cm以上の大形のものと、20cm程度の小形のものに分けることができる。(第11図) この3種類のうち、首長墓からはいずれの種類も出土している。これに対して群集墳からは、開く器形のものしか出土していない。

これらはさらに細分できる。直立大形のものは、3条以上の突帯がほぼ水平に巡っている。内面の刷毛目に注目すると、基部近くまで施すものと、途中まで施し、その下は撫でのみのものがある。どこまで施すか、その程度はまちまちである。

直立小形のものは、突帯数について明確に判断できる資料に乏しい。ほぼ水平に巡っている。内面の刷毛目は、基部近いものと途中のものがある。

開く器形のものは、突帯が2条のものと3条以上のものがある。首長墓出土では、概ね3条以上と考えてよいだろう。水平に巡るものと、やや上下しながら波状に巡るものがある。また突帯の断面が三角形になるものもある。下から1段目の突帯が、比較的高く巡るものもある。内面は概ね撫でのみの部分が多い。中には基部近くまで刷毛目を施すものがある。

一方では、この分類に適合しない一群も存在する。水道山古墳例は、口縁が開き、4本の突



第11図　円筒埴輪分類図 (1/8)

帯を有する。下から1段目と2段目、2段目と3段目の間が比較的広く、それぞれ透孔がみられる。3段目と4段目の間はやや狭い。こうした特徴は、下総型朝顔形円筒埴輪（轟　1974）と呼ばれているものである。また、一瓶塚古墳例は、低位置突帯の埴輪を含んでいる。前者は、管見では本地域で他に類例がない。後者は、唐沢山ゴルフ場窯跡（大川　1976）で、外面横方向の刷毛目を持つものとともに、多くの出土が報告されている。但し、これらの古墳の主体的な埴輪とは言えないだろう。こうした埴輪は、本地域にとって外来系と言えるのかもしれない。

次に編年的位置付けを考える。まず3種類各々に型式学的序列を検討する。次に他の遺物等を考慮して検証したい。

直立する器形では、大形も小形も内面の刷毛目で序列がみられる。基部近くまで施される方が、作りが丁寧であり古いと言えるだろう。中山8号墳例、正善寺古墳例は、大形と小形の2種類を有している。法量が分化した状態にあると言える。

開く器形では、序列をつける要素が多く複雑である。複数の系列があるのだろう。いくつかの傾向を指摘する。内面の刷毛目は、直立の器形と同じく徐々になくなる。突帯は、水平に巡るものから波状になる。断面三角形の突帯は、従来指摘されているように新しい要素である。また、基部から1段目までの高さは、徐々に高くなっていく。

B　編年

以上の諸要素を勘案して編年を作成すると第12図のようになる。1期は中山8号墳例のように、直立大形のものと小形のものが共伴している。内面の刷毛目は、基部近くまで施されている。中山8号墳は円墳であると伝えられている。しかし、平成4年佐野市教育委員会により中山古墳群の発掘調査が行われ、注目すべき発見があった。8号墳も一概に群集墳を構成する小円墳とは言い切れないだろう。ここでは一応首長墓の系列に加えて置く。

2期も同じく、直立する器形で大形と小形が共伴して出土する例がある。内面の刷毛目は基部まで施されなくなっている。正善寺古墳例では、水路工事の排土中から採取した資料を、出土状態に疑問が残るものの加えて考えるならば、やはり大小のセットがみられる。図の口縁部が直立した例は、やや特異である。破片が出土しているが、通常やや開くと思われる。十二天塚古墳例は小形のみが伝えられている。大形は未発見ながら存在するのか、あるいはこの時期一部ではセット関係が崩れるのか、現在のところ判断できない。

また一方で開く器形も登場する。この種類はこの時期群集墳に採用される。明神山5号墳例は、内面の比較的下位まで刷毛目が施されている。突帯は端正な作りで水平に巡っている。蓮沼3号墳も同様である。2期の埴輪は、直立する器形のものも含めて、外面の刷毛目を揃えようとする意識が強い。

1．中山８号墳(2)　2．蓮沼３号墳
3．明神山５号墳　4．十二天塚古墳
5．正善寺古墳(3)　6．明神山８号墳
7．小峯山４号墳　8．水道山古墳
9．一瓶塚古墳　10．機神山山頂古墳
11．中日向３号墳

第12図　円筒埴輪編年図（1/10）

3期には、開く器形が首長墓にもみられるようになる。内面の刷毛目は、上部にのみ施される。突帯は波状に巡るものが多い。一瓶塚古墳例は、3段突帯で内面は口縁部にのみ刷毛目がある。一方では直立する器形の低位置突帯も出土している。米山古墳例は、基部で径36cmを測る大形のものである。内面の刷毛目はやはり口縁部のみである。どちらも大小のセットはなく、この時期に分化していた法量の統合があったことを示している。前述した機神山古墳例や水道山古墳例も、器形、内面の刷毛目、突帯等を考慮するとこの時期だろうと考えられる。

群集墳では、明神山8号、小峯山4号墳が挙げられる。どちらも突帯が波状に巡り、内面には殆ど刷毛目がみられない。突帯は断面三角形を呈する。

4期では、良好な資料に恵まれず、特徴を明らかにすることは難しい。中日向3号墳のように1段目の突帯が高くなるものがこれに相当するのかもしれない。一方首長墓では、破片ばかりであるが海老塚古墳がこの時期となるだろう。外面に横方向の刷毛目を持った破片があり、注目される。また、海老塚古墳のように、発掘調査が行われても埴輪の出土が疎らであることもこの時期の特色と言えるのかもしれない。

C　実年代と機神山山頂古墳の位置付け

この編年に、副葬品等から実年代を与えてみたい。

1期の中山8号墳は、武人埴輪も伝えられている。刀装具は古い形態を伝えている。報告文に記されている6世紀末の年代は、やや新しく考えすぎているのではないだろうか。一応6世紀前半以前と捉えて置きたい。

2期では、明神山5号墳は、古墳群全体の分析から、ＴＫ43式期の築造と推定できる。

3期では、米山古墳から須恵器提瓶が出土している。鈎手は消滅しているものの、口縁部は明瞭な段が残っている。ＴＫ43もしくはＴＫ209式に相当すると考えられる。明神山8号墳は、やはり古墳群全体の中でＴＫ43～209式期に相当すると位置付けられる。須恵器大甕の年代とも矛盾しない。

4期では、海老塚古墳が発掘され多くの副葬品が明らかになった。ＴＫ43～209式期の馬具や武器が大勢を占める。

これらのことから、1期をＭＴ85式期以前で6世紀代の中葉以前、2期をＴＫ43式期で後葉、3期及び4期をＴＫ43～209式期で末葉と捉えたい。3期と4期の差は、埴輪の型式学的な序列によるもので、尚諸要素の検討が必要であるが、本地域の古墳を理解する上では必要な時期区分と考えられる。

大澤伸啓氏は円筒埴輪の配列を論じている。（大澤　1990）円筒埴輪を一定の間隔をおいて離して並べ、これが1重に巡るものを4型式とし、6世紀中葉～末の年代を与えている。「間な

し」に「囲い込む」ものから変化し、円筒埴輪列としては、本来の樹立の意味を失った段階であるという見解を示している。ここでの編年では、3、4期に相当する。器形が開くのは、間隔を開ける樹立に対応すると考えられる。また4期の出土量の減少は、樹立意味の喪失がさらに進んだと解釈できる。

機神山山頂古墳は、この編年の3期に相当する。TK43～209式期であり、前述した副葬品の年代よりもやや古くなる。埴輪を有する前方後円墳ということから、円頭大刀等は追葬と考えた方がよいのかもしれない。

尚、行基平山頂古墳採集の埴輪は、破片が殆どであるが、刷毛目の類似から十二天古墳と同時期の可能性が強いことを指摘して置きたい。多くの先学が指摘しているとおり、一応中期末の古墳として位置付けられるのではないだろうか。

7．石室の年代と性格

(1)足利市の横穴式石室の分類と年代

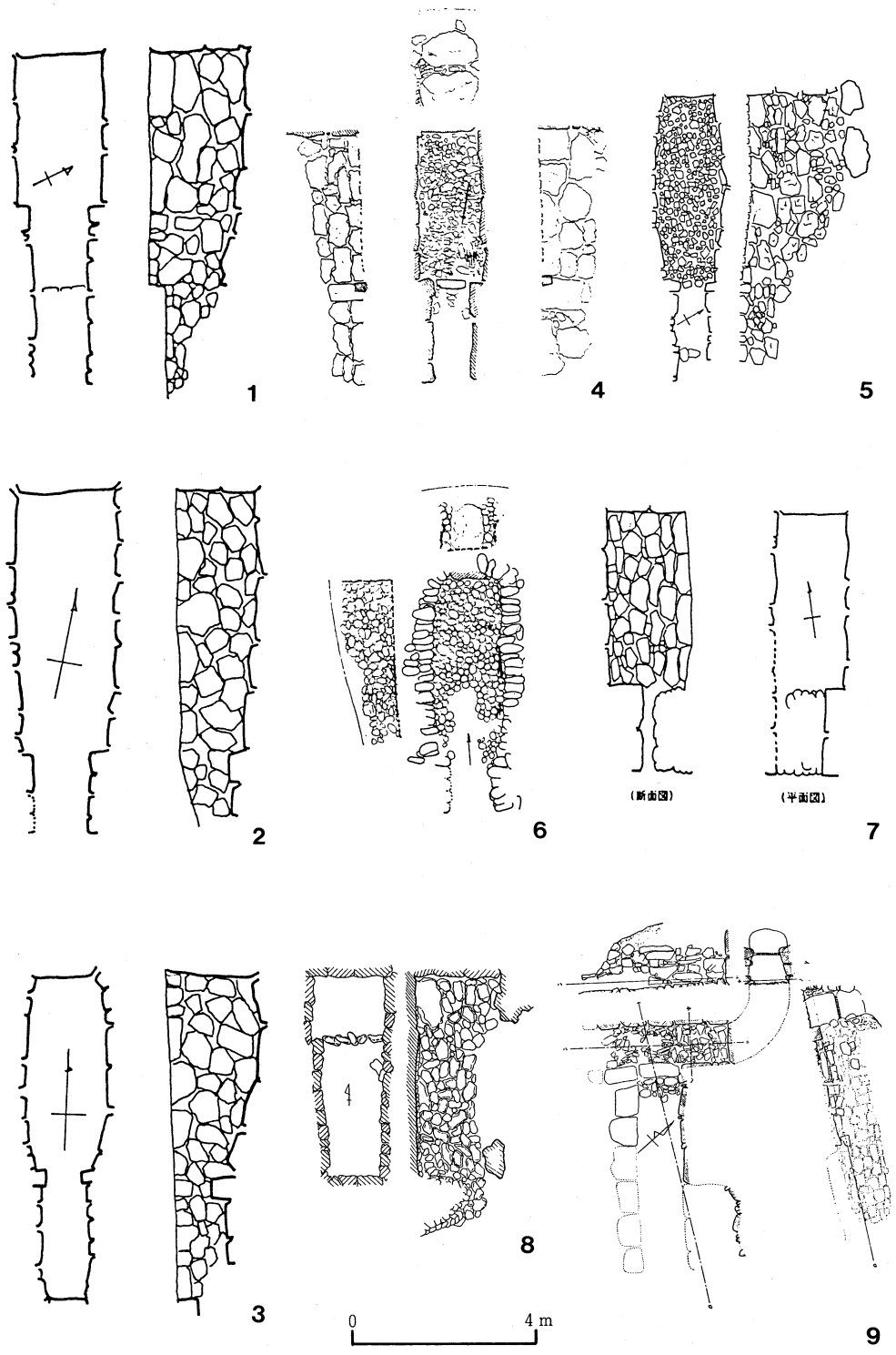
分類に先立って、基本的な考え方を述べておきたい。

近年の横穴式石室研究は、平面形を中心とした形態による分類だけでなく、その構造的相違も問題にしている。それによって注目されるようになったのは竪穴系横口式石室である。

栃木県においても竪穴系横口式石室が存在することは池上悟氏が指摘している。池上氏は九州で発生した竪穴系横口式石室に栃木県のその種の石室の系譜を求めている（池上　1988)。

また、ほぼ同じ石室の一群を例に挙げて、大橋泰夫氏は「飯塚型」の横穴式石室として型式設定している。飯塚型については、「無袖式であり、羨道から玄室へ一段の段差を持ち、羨道が短く、閉塞は川原石積みで行う。また、構築にあたって旧表土を掘り込むこと（地下式）も特徴の一つである。」と定義している（大橋　1990)。大橋氏の分析は横穴式石室から見た栃木県の古墳時代後期の動向の分析に主眼があるため、特に他地域との系譜的関係については触れていない。飯塚型の石室が、系譜的に見た場合には竪穴系横口式石室と同義ではないのは言うまでもないが、構造的に見た場合には竪穴系横口式石室の一種と呼んでも差し支えないかもしれない。

池上氏が竪穴系横口式石室、大橋氏が飯塚型と呼んでいる石室は現在までのところ、足利市の石室の中では発見されていない。池上氏、大橋氏が問題にしている石室は地下式で平面的、立面的に明確な羨道を持たない石室である。足利市の石室は地下式かそうでないかに係わらず、平面的、立面的に明確な羨道を持っているので、形態的特徴から無袖型、両袖型、片袖型の三つに分けて、それぞれの中で分類を行ない、その後で全体を見ていくという手順を踏みたい。



第13図　足利市の横穴式石室（両袖型、片袖型、T字形）

A．両袖型

代表的な例としては、足利公園３号墳（坪井　1888、足利市史編纂委員会　1974）（第13図１）、正善寺古墳（足利市史編纂委員会　1974）（第13図２）、羽黒古墳（足利市史編纂委員会　1974）（第13図３）、行基平１号墳（前沢ほか　1973）（第13図４）、行基平３号墳（前沢ほか　1973）（第13図５）、足利公園古墳群中西南部円墳（前沢　1965）（第13図６）が挙げられる。

足利公園３号墳、正善寺古墳、羽黒古墳は天井の縦断面形が奥壁から袖部に向かってゆるい曲線を描いて低くなり、袖部は玄門を持たない素形（尾崎　1954）であることが特徴である。

両袖型は玄室の平面形から長方形と胴張り形の二つに分けられる。

これらのうち天井石が残っている石室を、袖部を中心とした区画の施設に注意しながら比較してみたい。足利公園３号墳では天井の高さは入口に向かって減じてゆくが、袖部における天井の段差が不明瞭である。床面における段差も袖部と一致せず、羨道の中央付近に存在する。

正善寺古墳では袖部の天井に段差があり、前壁を形成している。床面の状況は流入土のため不明である。

羽黒古墳にも袖部の天井に段差がある。羽黒古墳の場合、袖部に載る天井石の下方への突出は正善寺古墳より大きい。羨道前端の床面には梱石がある。玄室の側壁には胴張りがある。

これらの石室における区画の施設の違いは、袖部における区画の意識の明確になっていく過程と解釈すると、「足利公園３号墳→正善寺古墳→羽黒古墳」という変遷を想定することができる。これらの古墳の年代を遺物の年代から検証してみたい。足利公園３号墳からは、刀子、挂甲、鉄鏃、馬具、須恵器、埴輪が出土している。年代は棘葉形杏葉（岡安　1988）と須恵器から陶邑編年（田辺　1966、田辺　1981）のＴＫ43型式に併行する時期、６世紀後葉と考えられる。羽黒古墳からは年代を推定できる遺物は出土していないが、類似した石室構造を持つ佐野市トトコチ山古墳（大川ほか　1975）からは円頭大刀、直刀、刀子、鉄鏃、馬具、耳環、須恵器が出土している。円頭大刀、鉄鏃と轡から６世紀後葉から７世紀初頭と考えられるので、羽黒古墳もはぼ同じ年代と考えられる。相対的には足利公園３号墳が古く、羽黒古墳が新しいということができ、先に考えた石室の変遷とも矛盾しない。

行基平１号墳、行基平３号墳、足利公園古墳群中西南部円墳は天井石を消失している。

行基平１号墳は割石積みの石室である。袖部の形態は素形で、側壁に大きめの石を一石立てて用いており、床面には梱石が一つある。玄室は長方形である。

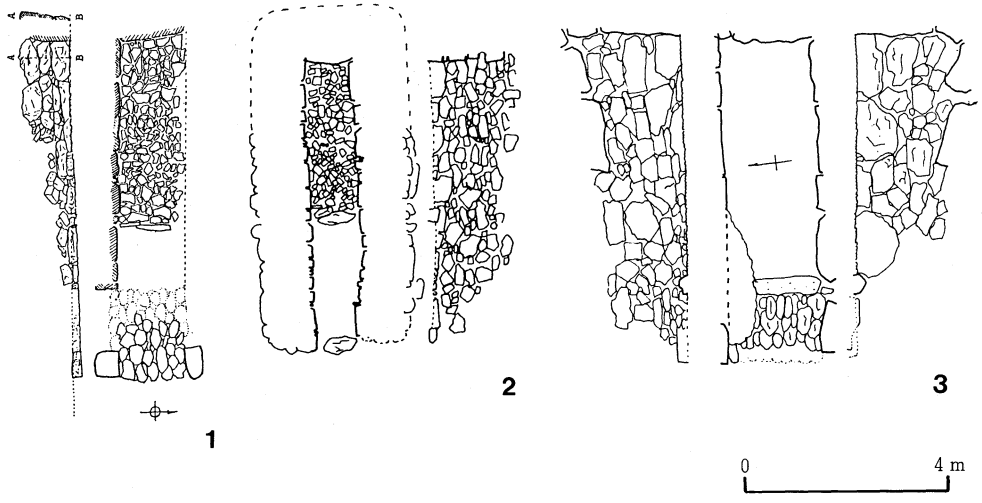
行基平３号墳は割石積みの石室である。袖部の形態は素形で、数段の石を積んでいる。床面の区画となる施設はない。玄室の側壁には胴張りがある。

足利公園古墳群中西南部円墳は川原石積みの石室である。袖部の形態は素形で、数段の石を積んでいる。床面の区画となる施設はない。玄室の側壁には胴張りがある。遺物は直刀、刀装

具、刀子、轡、玉類が出土している。直刀の形態にやや古い様相が見られるが（臼杵　1984）刀装具には八窓透の丸みを帯びた鐔があること（新納　1984）、轡は環状鏡板付轡で、連結法が引手・銜共連であること（岡安　1984）からＴＫ43型式期以降であり、古墳の年代も６世紀後葉と考えられる。行基平３号墳、足利公園古墳群中西南部円墳の石室は、袖部が数段の石を積む素形であること、玄室に胴張りがあることから羽黒古墳と同じ段階に相当し、時期的にも近接すると考えられる。

行基平１号墳は、一つの立石より成る素形の袖部であること、梱石を持つことから判断すると、袖部における区画の意識という点では最も進んだ状態ということができる。その点では羽黒古墳に後続すると考えることもできるが、天井の形態の比較ができないこと、玄室の平面形が違うことを考慮して、羽黒古墳と同時期か後続すると言っておくにとどめる。

このように袖部において天井や側壁の作り方に変化が見られるのに対して、平面形的には素形であるものが圧倒的に多いことが足利市の石室の特徴で、栃木県内においてはほかの地域に見られない、むしろ畿内や群馬県に多く見られる特徴である。また複室の石室が現状では見られないのも複室が少ない畿内や群馬県と共通している。これに対して、天井の縦断面形が奥壁から袖部に向かってゆるい曲線を描いて低くなる特徴は群馬県も含めて近隣には見られない特徴である。このような特徴は愛知県の西三河地域に多く見られる（加納ほか　1989）。ただし西三河の石室は複室で玄門を持つ点が足利市の石室と違っており、地域が離れていることも考えあわせると現状では直接的な系譜関係があるかどうかは決定できない。



第14図　足利市の横穴式石室（無袖型長方形）

B．無袖型

代表例として、両崖山東麓古墳（滝口ほか　1965）（第14図１）、田中町３丁目市営住宅裏１号古墳（前沢ほか　1959、前沢ほか　1966）（第14図２）、第一中学校東側山麓古墳（前沢　1949）（第14図３）、海老塚古墳（前沢ほか　1981）（第15図１）、機神山山頂古墳（第15図２）、明神山１号墳（前沢ほか　1985）（第15図３）、足利公園２号墳（坪井　1888、足利市史編纂委員会　1974）（第15図４）、山辺小学校裏東古墳（前沢　1957）（第15図５）、山辺小学校裏西古墳（前沢　1957）（第15図６）、長林寺裏古墳（高橋　1913、穴沢ほか　1990）が挙げられる。

無袖型は平面形によって長方形と胴張り形の二つに分けられる。

長方形の石室は両崖山東麓古墳と田中町３丁目市営住宅裏１号古墳である。田中町３丁目市営住宅裏１号古墳は根石に大きめの石を使っている。床面には梱石があること以外は破壊が著しいため詳細は不明である。両崖山東麓古墳からは直刀、刀装具、青銅製釧、鉄鏃、玉類が出土している。刀装具には鐔があるので年代は６世紀後葉以降と考えられる。

胴張り形の石室は明神山１号墳、足利公園２号墳、機神山山頂古墳、長林寺裏古墳、海老塚古墳、山辺小学校裏東古墳、山辺小学校裏西古墳である。これらは非常に似た特徴を持っており、同一の工人集団による築造の可能性も考えられる。この中では明神山１号墳、機神山山頂古墳が遺存状態が良好である。その特徴として挙げられるのは、天井の縦断面形は玄室から羨道まで段差を持たずに一直線となること、石室の平面形が玄室から羨道にかけてゆるい胴張りを持つこと、奥半分の側壁の根石に大きい石を使うことである。使用石材は割石と川原石があるが、足利公園２号墳は割石と川原石を併用している。入口部の施設は破壊されていて不明なものが多いが、長林寺裏山古墳では天井に段差があったことが報告されており、玄門構造をとる可能性がある。現状では他の古墳にまで敷衍できるかどうかは決定できない。

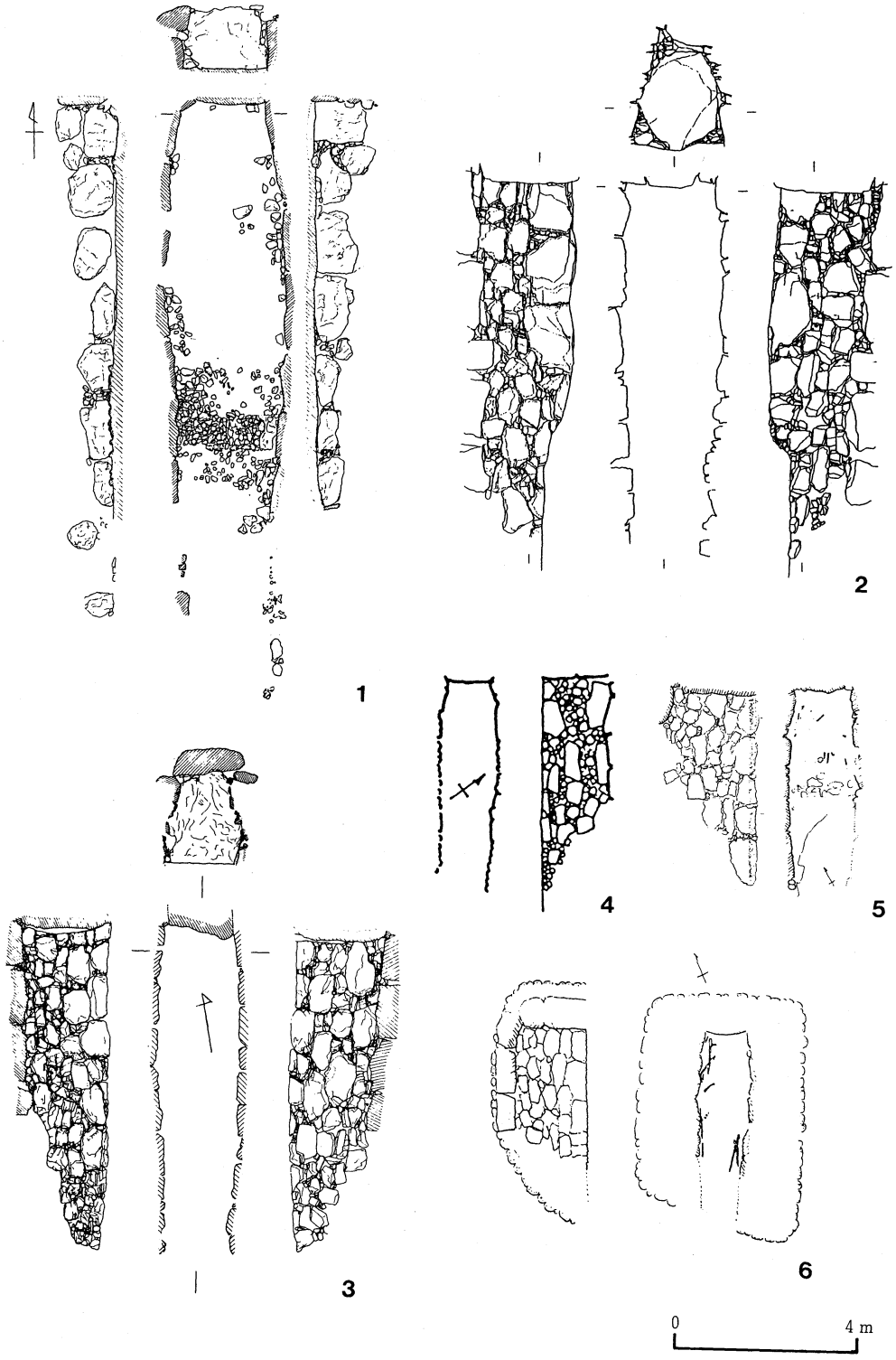
上記の古墳で年代を出土遺物から推定できるものを見ていきたい。

明神山１号墳からは直刀、刀子、鉄鏃、弓金具、馬具、装身具、埴輪が出土している。いろいろな年代の遺物が混じっているが、鉄地金銅張楕円形鏡板付轡と鉄地金銅張杏葉がＴＫ10型式期またはＭＴ85型式併行期の年代を示し、馬具のセットとして矛盾がなく、伝世の可能性が低いため、古墳の築造時期に近いと見なし、６世紀中葉の築造と考えたい（斎藤　1990）。

足利公園２号墳からは直刀、刀子、鉄鏃、馬具、釧、装身具、埴輪が出土している。環状鏡板付轡の連結法が引手・銜共連であることからＴＫ43型式期以降であり、古墳の年代も６世紀後半と考えられる。

機神山山頂古墳の遺物については別章で論じられており、詳細はそちらに譲ることとする。６世紀末葉から７世紀初頭の築造と考えられる。

海老塚古墳からは石室内から丸玉、小玉、釧、石突（矛）、鉄鏃、小札（挂甲）、馬具、金銅



第15図　足利市の横穴式石室（無袖型胴張り形）

製鈴、須恵器（フラスコ型長頸瓶、瓻）、墳丘からは埴輪片（円筒、朝顔形、人物、盾または靫、その他）が出土している。馬具及び鉄鏃からＴＫ43～ＴＫ209型式に併行し、６世紀末葉から７世紀初頭の築造と考えられる（栃木県立足利工業高等学校地歴部　1990）。

長林寺裏古墳からは双龍環把頭が出土している。それは新納泉氏による双龍環頭大刀の編年のⅥ式に相当し、７世紀前半と考えられる（新納　1983、穴沢ほか　1990）。

無袖型胴張り形の石室は先述したように、その特徴が非常に類似しており、形態の相違から変遷を考えるのは困難である。しかも遺物から推定した年代は６世紀中葉から７世紀前半にわたり、時間幅がある。遺物等の年代から先後関係を想定すると、明神山１号→足利公園２号→機神山山頂→海老塚→長林寺裏山となる。

Ｃ．片袖型　その他

現状で確認できるのは、立岩古墳群中の円墳（足利市史編纂委員会　1974）（第13図７）１基のみである。この石室は奥壁側から見て左片袖型で、袖部の天井に段差を有する。

栃木県では横穴式石室の出現期に片袖型の石室が見られる。それに対して、群馬県では片袖型の石室は出現の時期はもとより全体的に非常に少ない。立岩古墳群中の円墳は群集墳を構成する小さな古墳で、そのあり方が出現期の横穴式石室で片袖型である、大平町中山古墳（大和久ほか　1972、小森ほか　1989）と共通していることから、中山古墳と同じ時期であると考えることが可能である。そうだとすれば足利市における横穴式石室の出現の様相は栃木県のほかの地域と同じということができ、両袖型の石室では、形態において群馬県と親近性を見せている状況とは異なった様相を呈することになる。しかし、資料の制約もありこれ以上の検討は不可能なので速断は避けたい。

なお明神山古墳（足利市史編纂委員会　1974）（第11図８）は片袖型と報告されているが、通常の片袖型の石室の平面形とは異なっている。玄室長に対する幅の比率から判断すると、むしろＬ字形の石室の範疇で把握した方がよいようである。この他に織姫神社境内古墳（後藤ほか　1937）（第11図８）がＴ字形の石室として挙げられるが、市内では類例がないので系譜関係は不明である。

Ｄ．胴張りについて

次に両袖型と無袖型に共通する特徴である胴張りについて見ていきたい。片袖型は資料が少ないのでここでは省きたい。

両者に共通する特徴とは言っても、両袖型と無袖型とでは胴張りの構造が違っている。両袖型では玄室のみで完結する胴張りを有するのに対して、無袖型では玄室と羨道が一体となって

一連の胴張りを形成する。

先に両袖型の石室で、「足利公園3号墳→正善寺古墳→羽黒古墳」という変遷を想定した。この中で胴張りを持つのは羽黒古墳のみであり、両袖型石室の変遷の中では胴張りは後出的要素ということになる。両袖型の中で胴張りが出現する羽黒古墳の段階は6世紀第4四半期に相当する。しかし行基平1号墳のように袖部の構造では最も新しい様相を示しているのに長方形である石室もあるので、胴張りの出現の後も胴張り形以外の石室は引き続いて作られていたと考えられる。

それに対して無袖型の中で、長方形と胴張り形の石室で最も年代の遡る例を比較すると、長方形の石室の両崖山東麓古墳が6世紀後葉、胴張り形の石室の明神山1号墳が6世紀中葉で、胴張り形の石室の方が早く出現しているように見える。ただ足利市内では長方形の石室の類例が少なく、これより年代が遡る例が本当にないかどうかは明確でない。県内では無袖型長方形石室で最古の例は、ＭＴ85型式期併行の木心金属張壺鎧を出土した矢板市境林古墳（竹沢ほか　1973）があり、群馬県ではＭＴ15型式期併行の赤堀村洞山西北古墳（尾崎　1953ａ、加部　1989）、前橋市小旦那古墳（尾崎　1953ｂ、加部　1989）があるので、足利市の無袖型石室の中でも胴張り形より古い長方形の石室が今後発見される可能性はある。しかし無袖型胴張り形石室の中で最も年代が遡ると考えられる、明神山1号墳の年代は6世紀中葉と考えられ、両袖型における胴張りの導入よりも古く、仮に「長方形→胴張り形」という変遷や出現の順序を認めるとしても、両袖型における胴張りの出現の時期とは一致しない。

このことから両袖型と無袖型とでは胴張りの構造だけでなく、導入の年代にも違いがあり、両者はそれぞれ別個に胴張りを受容したと考えることができる。

そこで、次に胴張り形の石室を他の地域の石室と比較してみる。

両袖型は、栃木県内では足利市以外にも広く分布している。しかしそれらは、壬生町藤井古墳群（大和久　1967）の石室に代表されるような、川原石積みで玄門を持つ石室が圧倒的に多く、足利市の石室と様相を異にする。そのような中で、袖部が素形であるという点で西方村西方山3号墳（倉田　1972）と矢板市番匠峰1号墳（屋代　1978）が足利市の石室とやや共通性を有する。両者とも小山市、国分寺町、壬生町といった思川水系の首長墓と考えられる大型古墳が集中する地域から離れている点が注目できる。

県外では群馬県、埼玉県、東京都、神奈川県などの近隣の広い地域に類例を求めることができる（池上　1980）。これらの地域でも胴張りの出現は6世紀第4四半期かそれに近い時期であり、栃木県も含めて関東地方西部から北部にかけて広く共通する現象と見ることができる。

無袖型胴張り形の類例は、足利市以外の栃木県内では湯津上村二ツ室塚古墳前方部（辰巳ほか　1975）、蛭田富士山Ｂ－１号墳、蛭田富士山Ｃ－１号墳（大和久　1972）、真岡市神宮寺塚

古墳（山ノ井　1984)、鶏塚古墳（小森　1984)、烏山町大桶古墳（五十嵐　1978)、小山市北浦古墳（福田ほか　1981)、宇都宮市聖山公園１号墳（宇都宮市教育委員会　1988)、矢板市番匠峰４号墳（屋代　1978)、番匠峰６号墳（屋代　1978）が挙げられる。これらの石室は遺存状態のよくないものも多く、同じ古墳群の中に玄門を持つ石室も存在するので、足利市の石室と同じ構造かどうか不明なものも多い。ほとんどが川原石積みで、二ツ室塚古墳前方部石室を除くと、円墳や群集墳を構成する小型古墳の主体部であることが多い。これらの石室は平面形において飯塚型の石室に類似している。大橋泰夫氏によって６世紀中葉に年代付けられた飯塚Ａ型（大橋　1990）には、長方形の飯塚29号墳と胴張り形の５号墳がある。飯塚型は前述したように足利市の無袖型石室とは構造が違い、同列に論ずることは適当でない。それにも関わらず、足利市の無袖型石室と思川水系を中心とした飯塚型の両者にほぼ同時期に、構造の違いを越えて胴張りが出現するのは、関東地方で広く見られる６世紀第４四半期における両袖型石室の胴張りの出現とは年代や系譜において異なっているためと考えることができる。

県外での類例でははっきり認定できるものは多くないが、埼玉県神川村南塚原６号墳（埼玉県遺跡調査会　1973)、岐阜県関市陽徳寺裏山４号墳（大江ほか　1976）が挙げられる。

南塚原６号墳は側壁は川原石積みであるが、根石に大きな石を使用している点や年代が６世紀後半と考えられる点が機神山山頂古墳と共通しており、注目される。ただし埼玉県ではこの南塚原６号墳に先立ち、羨道に比べて奥壁幅がやや広い無袖型の石室が見られ、その石室に胴張りが導入されることによって、南塚原６号墳の石室が出現すると理解されており、足利市において想定した変遷とは異なっている。

陽徳寺裏山４号墳の系譜は岐阜県でもはっきりと追えるわけではないが、想定される年代は６世紀初頭と古く、足利市の無袖型胴張り形の石室の祖形と考えることも可能である。ただし奥壁の石の数、隅角の処理方法には違いが見られ、直接的伝播と考えるよりは間接的伝播と考えるべきであろう。また隣接して存在した陽徳寺裏山１号墳は両袖型胴張り形でこちらも関東地方の胴張りのある横穴式石室の初源と考えられている（池上　1980)。しかし他にもＭＴ15型式併行期の遺物を出土した、６世紀初頭の三重県茶臼山古墳（小玉　1988）があり、こちらは玄門を有する点が陽徳寺裏山１号墳とは異なっており、一元的な伝播では把握できないことを示している。石室の系譜ごとの受容についての考察は資料の増加を待つこととしたい。

⑵機神山山頂古墳の横穴式石室の位置付け

以上の分類をもとに石室から見た機神山山頂古墳の位置付けを行ないたい。

機神山古墳群の中で内部主体が分かっているのは、機神山山頂古墳が無袖型胴張り形、行基平１号墳が両袖型長方形、行基平３号墳が両袖型胴張り形、織姫神社境内古墳がＴ字形、長林

寺裏古墳が無袖型胴張り形の横穴式石室で、行基平４号墳と行基平５号墳が竪穴式小石室である。また機神山26号墳は横穴式石室であることだけ分かっている。これらの中では機神山山頂古墳の石室が最も規模が大きく、首長墓としての階層性を示している。しかし機神山山頂古墳と同じ形態の石室を持つ長林寺裏古墳があるので、形態においては群集墳内の小型古墳からの隔絶性は認められない。一方、行基平１号墳の石室の形態は他の古墳群の首長墓である正善寺古墳と共通しており、この傾向は機神山古墳群内だけのものではないことが分かる。しかし竪穴式小石室を主体部とする行基平４号墳と５号墳は墳丘を持っておらず、横穴式石室とは別の階層的表現が存在した可能性もある。

他の古墳群の中で見ても、明神山１号墳、足利公園２号墳は群集墳内の小型古墳、海老塚古墳は首長墓の系譜につながる大型円墳といった具合で、無袖型胴張り形の石室は階層的な偏りを見せていない。

次に年代的な分布を見てみたい。先に見た無袖型胴張り形石室の築造の年代順は明神山１号→足利公園２号→機神山山頂→海老塚→長林寺裏であった。この年代順と古墳の性格から判断すると、無袖型胴張り形石室は小規模古墳から受容がはじまり、順次、大規模古墳に採用されていく様相が窺える。それに伴い、石室が巨大化し、石材も大型化している。

それに対して、常見古墳群では首長墓の系列の中で石室の形態が変化している。群内では正善寺古墳→海老塚古墳→口明塚古墳という変遷が確認されている（市橋ほか　1986）。

正善寺古墳は両袖型長方形、海老塚古墳は無袖型胴張り形の石室を採用していることから、常見古墳群では両袖型長方形→無袖型胴張り形という変遷が窺える。正善寺古墳は全長103ｍの前方後円墳で、海老塚古墳は直径50ｍの円墳である。機神山山頂古墳をこれらの古墳との前後関係で位置付けるなら、機神山山頂古墳が前方後円墳であること、海老塚古墳を前方後円墳消滅後の首長墓と考えるべきであることから正善寺古墳→機神山山頂古墳→海老塚古墳という変遷をたどることができる。

両方の様相を綜合すると、無袖型胴張り形は時代が下るにつれて順次大型古墳へ採用されていくこと、首長墓に採用される石室の形態が変化していることが窺える。これらのことは思川水系における横穴式石室の状況と大きく異なっている。思川水系では首長墓には切石石室が採用されるが、切石石室は出現の当初から大型古墳にのみ採用されている。足利市の無袖型胴張り形石室にしろ、思川水系の切石石室にしろ、他の地域に見られない地域性の強い形態である。６世紀後半における石室の地域性の発現はそれぞれの地域の独自性の表現と考えられる。

8．古墳群の形成過程

(1)機神山古墳群の形成

機神山古墳群を構成する3つの前方後円墳は、前述したような順序で築造されたと推定される。また出土遺物や石室の検討から、最古の行基平山頂古墳は5世紀末頃、次の機神山26号墳は6世紀代、最新の機神山山頂古墳は6世紀末の築造と考えられる。群集墳はどうか。詳細は測量が進む今後の課題としたいが、現時点ではつぎのように言える。行基平1、3号墳は、石室の形態からＴＫ43～209式期となるだろう。長林寺裏古墳は、副葬品や石室からＴＫ209式期に相当すると考えられる。また織姫神社境内古墳は、出土した鉄鏃などからＴＫ43～209式期の年代が与えられる。

本古墳群の形成は次のようになるだろう。5世紀末頃、最初の首長墓である行基平山頂古墳が築造される。次の首長墓として、横穴式石室を有する機神山26号墳が築造される。さらに機神山山頂古墳が築造される。これと相前後して、群集墳の多くが造営される。少し遅れて優れた副葬品を有する長林寺裏古墳の造営となるのである。

このような古墳群形成のあり方は、本地域の他の古墳群と共通する一面がある。明神山古墳群も、前方後円墳築造後程なく多くの群集墳が造営されている。共通の背景があるものと考えられる。

(2)周辺の古墳群の動向

6世紀代の足利地方には、他より一歩抜きでた首長墓の系譜を辿ることができる。

市橋一郎、大澤伸啓、足立佳代の各氏が足利市域の古墳について概観している中で、本地域全体の首長墓の変遷を捉えた視野で、常見古墳群を取り上げている。正善寺古墳から海老塚古墳を経て口明塚古墳に至る順序で変遷するという従来の見解が、発掘調査によって裏付けられた。こうした変遷が6世紀の後半代にあり、その間に前方後円墳から円墳へと変化するとしている。(市橋ほか　1992) この古墳群は、前方後円墳消滅後としてはひときわ大規模である。また、周囲に群集墳を伴わないことも特色である。このことも他の小首長墓に卓越する古墳群のあり方なのかもしれない。[6]

機神山古墳群の首長墓の系譜は、機神山山頂古墳を最後に不明瞭になる。その築造は正善寺古墳と海老塚古墳の間とみられる。同じ時期には、水道山古墳が築造されている。これを最後に、足利地方では前方後円墳が消滅すると考えられる。両古墳は最後の前方後円墳であると言えるだろう。

その後の首長墓の条件としては、前方後円墳ではないにしろ、他より大規模な墳丘を有し、優れた副葬品がみられなくてはならないだろう。現在のところ、候補はあるものの、常見古墳

群を除いては明らかになっていない。同じ首長墓ではあるが、常見古墳群と他の古墳群の主墳との間には、この頃から大きな格差が生じたと思われる。常見古墳群に眠る一族が、6世紀末から7世紀始めまでに足利地方を統括する首長に成長したと考えてよかろう。

9．まとめにかえて（今後の課題）

機神山古墳群を中心に足利市の後期古墳について考察してみた。残された課題は多いが、それらを考えることでまとめにかえたい。

日本の各地域において後期古墳を考えるとき、全国的、斉一的現象として把握できるのは前方後円墳と埴輪の消滅の問題である。栃木県では前方後円墳の消滅後、首長墓は円墳に変化する。これは群馬県や千葉県で方墳に変化するのと対照をなしている。埴輪も前方後円墳に先立って消滅することも知られている。しかし群馬県では最後の前方後円墳まで埴輪が存続しており、地域によって消滅の時期がずれることを示している。足利市においては前方後円墳消滅後は、海老塚古墳のような円墳が築造される点では栃木県内の他の地域と共通している。

しかし埴輪に関しては市内の殆どの前方後円墳が埴輪を有しており、群馬県に近い状況を呈している。それだけでなく、海老塚古墳でも埴輪が出土しており、前方後円墳消滅後もなお埴輪が残存していたことが分かる。このような特殊性は足利市地域独自のものであるが、その範囲がどこまでおよぶかは今回明確にし得なかった。今後の課題としたい。

足利市は栃木県でも特に古墳が密集する地域として知られているが、それらのほとんどは群集墳を構成する小規模な古墳である。今回扱った古墳の数は限られており、群集墳論を展開できるような状況にない。しかし埴輪や横穴式石室の様相からは、首長墓と考えられるような大規模古墳と対比した場合、様相が違っていることは分かる。横穴式石室における無袖型胴張り形と埴輪における開く器形は両者とも首長墓よりも群集墳の方が早く出現している。

これらの理由については明らかではないが、それぞれの生産体制はもとより、首長墓と群集墳の階層的関係の追求を通して明らかにすべきことであろう。

足利市は栃木県内にあっては、その地理的条件からほかの地域から独立して考えられることが多い。そのためか、近年、著しい進展を見せている栃木県の古墳時代研究の中でも足利市の古墳については明確な位置付けが成されているとは言い難い。それは本論で見たような古墳時代後期における足利市地域の独自性によるところが大きい。今後、その独自性をより多く抽出し、詳細な分析をしていかなければならないと考えている。

末筆ではありますが、石室の実測と本稿作成に当たり多くの方にお世話になりました。石室の実測に参加していただいた内山敏行氏、古文書の判読にご協力いただいた絵面克明氏、ご助

言いただいた市橋一郎氏、大金宣亮氏、大川文昭氏、大沢伸啓氏、大橋泰夫氏、小森哲也氏、品田忠保氏、津野仁氏、滝瀬芳之氏、仲山英樹氏（五十音順）、足利工業高校地歴部卒業生・生徒諸君に、厚くお礼を申し上げます。（1993.2.18稿）

（註）

(1) 第２図は、記載をもとに、住宅地図の番地から推定復元した。

(2) 機神山山麓も含めて、足利長尾氏による戦国城下町の惣構えがあったものと考えられる。この時の普請や作事によって破壊された古墳も、相当数あるだろう。

また、民間の宅地造成以外では、大正14年創立の足利実践女学校（現足利短期大学付属高等学校）や、昭和20年以降の足利赤十字病院に係る工事も、古墳群に影響を及ぼした可能性がある。

(3) この中で川島氏が引用されている、峯岸政逸著『古墳発掘遺物雑記』は、所在がわからず実見できなかった。

(4) 市橋一郎氏の担当した文献（足利市史編纂委員会　1979）に全文の写真が掲載されている。著者については、日下部高明氏の研究（日下部　1984）がある。

(5) 1991年の文献では、24号墳を22号墳と誤解した。当時顧問であった斎藤の責任でありお詫びして訂正したい。尚、平成４年には、機神山14号墳の測量調査を実施している。

(6) 市橋一郎、大澤伸啓の両氏の御教示による。

参考文献

相馬古雲　1898　『足利町織姫山頭古墳発掘明詳図』

青木健二　1981　『蓮沼３号墳』日本窯業史研究所

足利市教育委員会　1983　「中日向古墳群」『足利市文化財総合調査昭和57年度年報　Ⅳ』

足利市教育委員会　1986　「吾妻古墳群」『足利市文化財総合調査昭和59年度年報　Ⅵ』

足利市教育委員会　1986　「機神山古墳群」『足利市文化財総合調査昭和59年度年報　Ⅵ』

足利市教育委員会　1989　『足利市遺跡地図』

足利市教育会、足利郡教育会　1943　『足利市郡古墳調査誌』

足利市史編纂委員会　1974　『近代足利市史　第３巻史料編』

足利市史編纂委員会　1979　『近代足利市史　第５巻史料編』

足利市役所　1928　『足利市史　上巻の一』

穴沢咏光、馬目順一　1990　「足利市西宮町長林寺裏古墳（機神山22号墳）出土の双龍環頭大刀」『古代』第89号

五十嵐典夫　1978「大桶古墳」『烏山町史』

市橋一郎　1979　「足利地方の埴輪の消滅期について」（古墳勉強会発表資料）

市橋一郎、大澤伸啓、斎藤弘　1986　「渡良瀬川流域」『第14回古代史サマーセミナー栃木県研究報告資料』古代史サマーセミナー事務局　栃木県考古学会

市橋一郎、大澤伸啓、足立佳代　1992　「足利市域における古墳調査の状況」『唐沢考古』第11号　平成４年

池上悟　1980　「東国における同張り石室の様相」『立正史学』第47号

池上悟　1988　「野州石室考」『立正大学文学部論叢』第88号

臼杵勲　1984　「古墳時代の鉄刀について」『日本古代文化研究』創刊号

宇都宮市教育委員会　1988　『聖山公園遺跡Ｉ』

大江　ほか　1976　『陽徳寺裏山古墳群』関市教育委員会

大川清、戸田有二　1975　「トトコチ山古墳」『佐野市史　資料編Ｉ　原始・古代・中世』

大川清　1976　『下野の古代窯業遺跡』栃木県教育委員会

大沢哲道　1913　『足利郡足利町字西ノ宮長林寺埋蔵物発見について』（栃木県立図書館所蔵）

大澤伸啓　1990　「円筒埴輪列について」『栃木県考古学会誌』第12集　栃木県考古学会

大橋泰夫　1990　「下野における古墳時代後期の動向」『古代』第89号

大和久震平　1967　『藤井古墳群発掘調査報告書』壬生町教育委員会

大和久震平　1972　『蛭田富士山古墳群』栃木県教育委員会

大和久震平、塙静夫　1972　『栃木県の考古学』吉川弘文館

岡安光彦　1984　「いわゆる「素環の轡」について－環状鏡板付轡の型式学的分析と編年－」『日本古代文化研究』創刊号

岡安光彦　1988　「心葉形鏡板付轡・杏葉の編年」『考古学研究』第35巻第３号

尾崎喜左雄　1953ａ　「横穴式古墳無袖型石室の研究」『群馬大学紀要人文科学編』第３巻

尾崎喜左雄　1953ｂ　『小旦那古墳発掘調査報告』群馬大学史学研究室

尾崎喜左雄　1954　「横穴式石室編年への一考察－主として石材の取り扱い方について」『史学会報』第５輯　群大史学会

加納俊介、北村和宏、服部哲也　1989　「愛知県における初期横穴式石室の様相」『第10回三県シンポジウム　東日本における横穴式石室の受容』

加部二生　1989　「群馬県東部における初期横穴式石室の様相」『第10回三県シンポジウム　東日本における横穴式石室の受容』

川島守一　1938　『足利考古圖録』

川島守一　1952　「足利地方の古墳文化」『下野史談』第29巻第１号
北武蔵古代文化研究会　群馬県考古学談話会　千曲川水系古代文化研究所　1985　『第６回三県シンポジウム　埴輪の変遷　－普遍性と地域性－』
木村等、大橋泰夫　1986　『星の宮神社古墳・米山古墳』栃木県教育委員会
日下部高明　1974　「足利の自然」『足利市史研究』第２号
日下部高明　1984　「「足利学校」保存の功労者　相馬朋厚」『教育に光を掲げた人々　第２集』栃木県連合教育会
倉田芳郎　1972　「８、西方山古墳群」『東北縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書』日本道路公団東京支社　栃木県教育委員会
小玉通明　1988　『井田川茶臼山古墳』三重県教育委員会
後藤守一、内藤政光、森貞成　1937　『足利市織姫神社境内古墳発掘調査報告』織姫神社奉賛会
小森哲也　1984　「京泉シトミ原古墳群」『真岡市史　第１巻考古資料編』
小森哲也、中村享史　1989　「栃木県における横穴式石室の受容」『第10回三県シンポジウム　東日本における横穴式石室の受容』
埼玉県遺跡調査会　1973　『青柳古墳群発掘調査報告書』
斎藤弘　1990　「足利市明神山古墳群の築造年代について」『唐沢考古』第９号
斎藤弘　1991　「足利市機神山24号墳の墳丘に就いて」『唐沢考古』第10号
高橋健自、谷井濟一　1913　「下野国足利町字西ノ宮の古墳の調査」『考古學雑誌』第４巻第１号
滝口宏、前澤輝政　1965　「足利市本城両崖山東麓古墳調査報告」『古代』第10号
瀧瀬芳之　1984　「円頭・圭頭・方頭大刀について」『日本古代文化研究』創刊号
竹澤謙、赤山容造　1973　『栃木県矢板市境林古墳発掘調査報告書』栃木県教育委員会
辰巳四郎、山越茂　1975　『二ツ室塚発掘調査概報』栃木県教育委員会
田辺昭三　1966　『陶邑古窯址群Ⅰ』平安学園考古学クラブ
田辺昭三　1981　『須恵器大成』角川書店
坪井正五郎　1888　「足利古墳発掘報告」『東京人類學會雑誌』第３巻第30号
栃木県　1927　『栃木県史蹟名勝天然記念物調査報告　第２輯』
栃木県立足利工業高等学校地歴部　1990　「機神山26号墳測量調査報告」『研究集録』第11号
栃木県高等学校文化部連盟社会部会　平成２年
栃木県立足利工業高等学校地歴部　1990　「機神山26号墳の測量調査について」『栃木県考古学会誌』第12集　平成２年

栃木県立足利工業高等学校地歴部　1991　「機神山22号墳測量調査報告」『研究集録』第12号
栃木県高等学校文化部連盟社会部会　平成３年
栃木県立足利工業高等学校地歴部　1992　「行基平山頂古墳測量報告」『研究集録』第13号
栃木県高等学校文化部連盟社会部会
轟俊二郎　1974　『埴輪研究　第１冊』
新納泉　1983　「まとめ・武器」『湯舟坂２号墳』久美浜町教育委員会
新納泉　1984　「関東地方における前方後円墳の終末年代」『日本古代文化研究』創刊号
福田定信、松浦宥一郎　1981　「北浦古墳」『小山市史　史料編・原始古代』
前澤輝政　1949　『足利市一中東麓古墳調査概報』
前澤輝政　1957　「足利市山辺小学校裏古墳（二基）調査報告」『古代』第25・26号
前澤輝政、橋本勇　1959　『足利市田中町三丁目市営住宅裏古墳調査報告』
前澤輝政　1965　「足利公園古墳群中西南部円墳」『古代』第45・46号
前澤輝政、橋本勇　1966　『足利市田中町三丁目市営住宅裏古墳調査報告その二』
前澤輝政、橋本勇、田村允彦　1973　『足利行基平古墳群発掘調査報告』
前澤輝政　1975　『下野の古代史　（上）、（下）』
前澤輝政　1977　『下野の古墳』
前澤輝政、橋本勇　1981　『海老塚古墳』足利市教育委員会
前澤輝政　1983　『新編　足利の歴史』
前澤輝政、橋本勇　1985　『明神山古墳群』毛野古文化研究所、山辺東部土地区画整理事務所、足利市教育委員会
前澤輝政、市橋一郎、山崎博章　1985　「助戸十二天古墳第２次発掘調査」『昭和59年度埋蔵文化財発掘調査概報』足利市遺跡調査団、足利市教育委員会
前澤輝政、市橋一郎、柏瀬順一、足立佳代　1989　「正善寺古墳第１次発掘調査」『昭和63年度埋蔵文化財発掘調査年報』足利市遺跡調査団、足利市教育委員会
前澤輝政、市橋一郎、柏瀬順一　1989　「上渋垂赤城神社古墳第１次発掘調査」『昭和63年度埋蔵文化財発掘調査年報』足利市遺跡調査団、足利市教育委員会
前澤輝政、市橋一郎、柏瀬順一　1990　「正善寺古墳第２次発掘調査」『平成元年度埋蔵文化財発掘調査年報』足利市教育委員会
丸山瓦全　1920　『足利考古圖集』
森田久男　1984　「一瓶塚古墳」『田沼町史　第３巻　資料編２　原始古代・中世』田沼町
森田久男　1985　「田沼町への古墳文化の波及と展開」『田沼町史　第６巻通史編（上）』田沼町　昭和60年

矢島俊雄、茂木克美　1988　『市道1059号線改良工事地内遺跡発掘調査報告書　向原遺跡　蓮沼遺跡　十二天塚古墳』佐野市教育委員会

矢島俊雄、茂木克美　1989　『小峯山遺跡』佐野市教育委員会

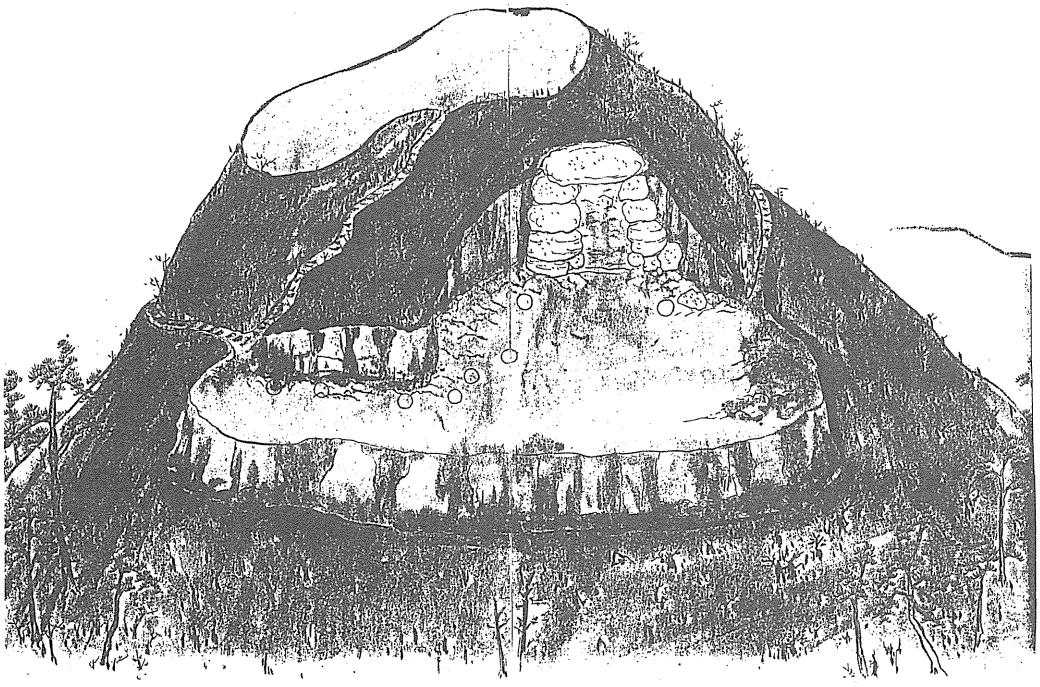
屋代方子　1978　『番匠峰古墳群』矢板市教育委員会

柳田貞夫　1980　『足利氏の世界－足利地方古代末期史－』

山ノ井清人　1984　「神宮寺塚古墳」『真岡市史　第１巻考古資料編』

若林勝邦　1893　「下野國足利に於て近頃発見せる埴輪土器」『東京人類學會雑誌』第８巻第89号

『下野國古墳圖誌』（著者、発行年不明　栃木県立図書館所蔵）



第16図　機神山山頂古墳か？（『下野國古墳國誌』より）

研究紀要　第１号

発　　行　平成４年３月31日

編集・発行　財団法人　栃木県文化振興事業団
埋蔵文化財センター

〒329-04
栃木県下都賀郡国分寺町大字国分乙 474
TEL 0285-44-8441
FAX 0285-44-8445

印　　刷　株式会社　松井ピ・テ・オ・印刷